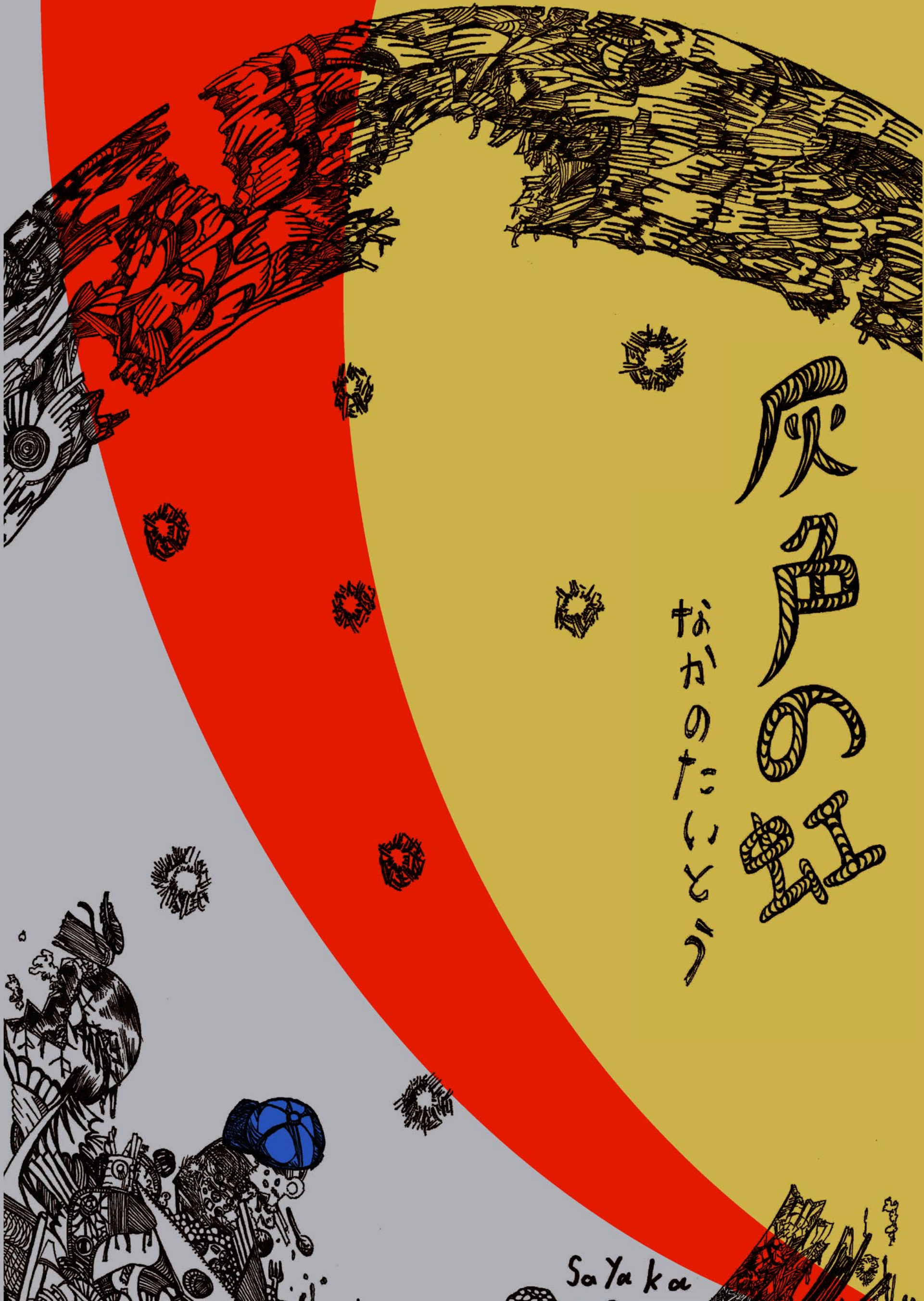


灰角の虹

おかのたいとう

Sa Ya ka



くら暗く、つめ冷たい、はいいろせかい灰色の世界。

ゆき雪のように、た絶えまなく、しんしんとふりつづいているのは、くず崩れてゆこうとしているこの世界の、いたるところからはがれお落ちたむすう無数の、かけらでした。

はい灰のようでもあり、ぼんやりと、ほのかにあわ淡く、き消えてなくなりそうなほどあわかがや輝きながら、ふわりふわりと見あげた空からしず静かに、かけらはお落ちていました。

えいえん永遠に明けることのない夜の空です。

空はやみやみ闇のように黒いまま。

それに、くず崩れてゆこうとしている、この灰色の世界からはがれお落ちたかけらが、いがい灰色以外の何色になれるはずありません。

ですからそこは、どこまでいっても灰色だけの世界。

色のない世界でした。

ピリリと音がしそうなくらいい凍てついた夜の空気です。

耳をす澄ませばふりお落ちるむすう無数のかけらのかな奏でる小さな小さな音が、しず静かにそっと聞こえてくるようでした。

ふ降りしきる世界のかけらいがい以外には何もない、灰色の世界です。

男の子がひとり、こちらに向^むかって歩いてきます。

キュッ。キュキュッ。キュッ。

この何もない灰色の世界に、男の子の足音がひとときわ高く響^{ひび}いていました。

今日もまた、男の子は崩^{くず}れ落^おちた世界のかけらを、ひとつ、またひとつと拾^{ひろ}い集^{あつ}めて、背負^せった袋^おの中に大切そうにしまっていました。

地面^{じめん}には灰^{はい}のようなかけらが厚^{あつ}く、雪のように降^ふり積^つもっています。ほとんどのかけらは、砂^{すな}のように細^{こま}かいものばかりでした。ですが、ごくまれに、大きなかけらが降^ふってくる場合があります。そうした大きなかけらを、男の子は選^{えら}んで集^{あつ}めているようでした。

キュッ。キュキュッ。キュッ。

男の子は足を止めました。きびしい寒^{さむ}さです。かじかんだ自分の手に、男の子はハーツと息^{いき}を吹^ふきあてます。

すると白い息^{いき}は、すぐに吸^すい込^こまれるようにして、冷^{つめ}たい夜の闇^{やみ}へと消^きえていきました。

かぶったフードにも、無^む数^{すう}のかけらが厚^{あつ}く降^ふり積^つもっています。男の子はそれを手ではたいて丁^{てい}寧^{ねい}に振^ふりはらうと、顔をあげて空を見あげました。

灰色の虹

灰色の世界に住^すむ、灰色の男の子です。

男の子にもまた、色はありません。

男の子はこの灰色の世界の、ただひとりの^{じゅうにん}住人でした。

高い^{とう}塔の下に^{そまつ}粗末な^{こや}小屋を^た建て、ずっとひとりで暮らしていました。

その高い^{とう}塔も、男の子がひとりで^た建てたものです。^{かんせい}完成には、まだほど遠いはずですが、見あげても^{とう}塔の先は見えません。夜の空に^む向かってひとときわ高く、細く^の伸びていました。

そして^{とう}塔は、ちらちらと^{めいめつ}明滅を^く繰り返しながら、^き消えてしまいそうなくらいに^{あわ}淡く、ほのかに、ほんのり、光っていました。そうやって^{あわ}淡く光っているのは、その^{とう}塔もまた、はがれ^お落ちた^{むすう}無数の光るかけらでできているからです。

男の子は^{きのう}昨日と同じように今日もまた、^{せ お}背負った^{ふくろ}袋から^{さぎようよう}作業用の^{て お}手押し^{ぐるま}車に、^{ひろ}拾ってきたかけらを^{うつ}移しかえていました。

そしてその^{て お}手押し^{ぐるま}車がいっぱいになったら、^{とう}塔にそってぐるぐるまわって上へ上へと^{のぼ}登っていく、^{らせん}螺旋になった長い^{さかみち}坂道を、ひとりで^お押して、あがっていくのです。

^{くず}崩れゆく世界の^{ほうかい}崩壊を止めることは、だれにもできません。

その^{とう}塔も、男の子が作りあげるそばから、^{すこ}少しずつ^{くず}崩れていきました。

男の子は^{くず}崩れ^お落ちてしまったところをひとつひとつ^{ていねい}丁寧に直しながら、上へ上へと^{とう}塔を^{のぼ}登っていかなければなりませんでした。

灰色の虹

途中でかけらがなくなれば、また地上におりてきて、ふたたびかけらをひとつ、またひとつと拾い集め、塔に戻ってまた登ります。

何度も、何度も、何度も、何度もです。

気が遠くなるくらいの長い長い時間をかけて、そうやって塔は、少しずつ少しずつ伸びていったのです。

明けない夜の世界です。

一日分の作業が終われば、一日が終わります。

男の子は小屋に戻ると、わずかばかりの粗末な食事を取りました。

そして、大切にしまっているたったひとつの宝物を取りだして、長いことじっと眺めたあとで、静かに、そっと、眠りにつくのです。

ときにはその宝物をしまい忘れて、手に握りしめたまま眠ってしまうこともありました。

この世界には、灰色のかけら以外のものはありません。

男の子が食べる粗末な食事もかけらなら、男の子の大切な宝物もかけら。それらはみな、わたしたちのだれも見向きさえしないものでした。

眠りがさめれば次の一日のはじまりです。

男の子は、ふたたびかけらを集めはじめます。集めたかけらを積み重ね、そうやって少しずつ塔を高くしていくのです。

灰色の虹

自分がいつから^{とう}塔を作りはじめたのか、男の子は^{おぼ}覚えていませんでした。自分がなぜ^{とう}塔を作ることになったのかも、^{おぼ}覚えていませんでした。

それだけではありません。自分が今いくつで、いつ、だれから^う生まれたのか、そもそもこの世界に、だれか^{ほか}他に人がいたことがあるのか、男の子は何ひとつ^{おぼ}覚えていませんでした。

そして男の子は、この灰色の世界^{いがい}以外の世界がどこかにある、などということを、考えてみたことさえなかったのです。

ある日のことです。

その日も男の子は、世界のかけらを^{ひろ}拾い^{あつ}集めていました。

ふと顔をあげた男の子は、今まで見たことがないくらい大きなかけらが^お落ちていることに気づきました。

^{ひろ}拾おうと思って、その大きなかけらに^ふ触れた男の子でしたが、さわってみて、ただ、もう、びっくりです。

それは^{あたた}温かかったのです。

しかもその^{あたた}温かさは、自分の体に^ふ触れたときとまったく同じ^{あたた}温かさでした。

男の子は^{いそ}急いでその大きなかけらに、うっすらと^ふ降り^つ積もっていた^{すな}砂ぼこりのように目の^{こま}細かいかけらの数々を、はらいのけました。

それは一羽のカラスでした。

カラスは^{ねむ}眠ったように目を^と閉じていて、男の子が^ふ触れても^{みうご}身動きひとつしませんでした。

男の子はカラスを見たことはありません。ですから男の子には、それがカラスなのか、本当のところは、わかっていませんでした。それでも、その^ふ触れたときの^{あたた}温かさが^{ほか}他のどんなものとも、ちがうということだけは、男の子にもすぐにわかったのです。

灰色の虹

男の子はカラスを抱いて急いで小屋に戻りました。

それからしばらくのあいだ、男の子は小屋から外に出ることなく、ずっとカラスを抱いて過ごしました。起きているときも、眠っているときも、胸に抱いたカラスの温かいぬくもりを感じながら。

せいぜい二、三日の出来事だったはずです。ですが、これほどまでに長いあいだ男の子が仕事を休んだのは、これがおそらく、初めてのことでした。

カラスを^だ抱いて^す過ごす何日目かの明けない夜が^す過ぎようとしていました。

男の子は死んだように^{ふか}深い^{ねむ}眠りについたままです。それだけ^{ねむ}眠りが^{ふか}深いと、何かが知らないうちになくなっていたとしても、はたして気づくかどうか。

男の子は目をさまして^{がくぜん}愕然としました。

カラスがいない!?

^は跳ねるようにして^と飛び^お起きると、男の子は部屋の中をすみからすみまで、くまなく^{さが}探しまわりました。もともと何もない^{そまつ}粗末で小さな^ほ掘ったて^{ごや}小屋です。カラスがいたなら、ひと目でそうとわかるはずでした。

男の子は^{なんど}何度も^{なんど}何度も自分の^{もうふ}毛布をめくっては、^{ねどこ}寢床の上をパンパン、パンパン、手ではたきました。かけらを入れるためにいつも^{つか}使っている^{ふくろ}袋も、ぜんぶ^{うら}裏がえして、もう中に何もないことを^{たし}確かめてあるというのに、それでも何かが、もしかしたら出てくるかもしれないと思ってか、プルプル、プルプル、^{なんど}何度も^{なんど}何度も^ふ振っていました。大切な^{たからもの}宝物を入れた引き出しだって^{れいがい}例外ではありません。引っぱり出して、^{なかみ}中身をどけて、トントントン、トントントン。ひっくりかえして^{うら}裏を^{なんど}何度も^{なんど}何度もはたいていました。

灰色の虹

最後^{さいご}にはとうとう着^きているマントまで脱^ぬぎはじめるしまつです。

男の子は、すっかり裸^{はだか}になって自分の背^せ中^{なか}にカラスがいないかどうかを確^{たし}かめていました。

カラスは見つかりません。

男の子は大きな大きなため息^{いき}をつきました。男の子は、落^{らく}胆^{たん}することには、なれっこになっているはずでした。

そのときです。

「ああ、やだ。ああ、やだ。やだ、やだ、やだ。ここは、なんて気が滅^め入^いるところなんでございましょう」

小^こ屋^やの外でそう声がしたかと思うと、静^{しず}かに、すうっと扉^{とびら}がひら開^{ひら}きました。

カラスです。

外からカラスが入ってきたのです。

カラスは肩^{かた}や頭^{あたま}に、うっすらと降り積^ふもった目の細^{こま}かい灰色のかけらを、自分の黒い羽^は根^ねで、サッ、サッ、サッと、きれいに、はらうと、男の子に向^むきなおって言いました。

「こんにちは、ぼっちゃん」

男の子は、ただ、ただ、もう、おどろくばかりです。

口をあけても言^{ことば}葉は出てきません。

見かねたカラスが先を^{つづ}続けました。

「わたしはただのカラスですよ、ぼっちゃん。名前なんてたいそうなものはございません。ぼっちゃんに^{たす}助けていただいたことには、まことに^{かんしゃ}感謝もうしあげるしだいなのでございますが、どうやらわたしは、とんでもないところに来てしまったようでございます。ああ」

カラスは^{さいご}最後に、長いため^{いき}息をひとつ、つきました。男の子はそうしたカラスのことを、^{しじゅう}始終目をまるくして見ていました。

「よろしゅうございますか？」

カラスが言いました。

男の子はカラスの目を、さらにいつそう真剣^{しんけん}に、見つめかえました。

「わたしのいた世界は、ここではございません。何^{なんど}度ももうしあげるの
は非常^{ひじょう}に心ぐるしいのでございますが、わたしは気づいたらこの世界に
迷^{まよ}い込^こんでいたのでございます」

カラスは自分のいた世界のことをどうにかしてわかってもらおうと、
あきらめずに何^{なんど}度も何^{なんど}度も説明^{せつめい}していました。

けれども、一^{いっしょう}生^{けん}懸^{けん}命^{めい}、そうした世界、こことはちがう別^{べつ}の世界がある
ということを男の子に話して聞かせても、男の子は首をかしげるばかり
で、いっこうに、わかったそぶりを見せないのです。

「わたしの世界では空は青く、森は緑^{みどり}で、夕日は赤いのでございます。
世界とは、じつに色で満^みちあふれているものでございまして、その色に
いたしましても、日^ひ々^びこっこくと変^{へん}化^かしていくのでございます。ぼっちゃん？
色でございますよ、色。おわかりになりますか？」

わかるはずありません。ここは色のない、灰色の世界なのですから。

「しかたがありませんね」

カラスはそう言うと、考えをめぐらせるために口を閉ざしました。男の子は、そうしたカラスからも目をはなすことはなく、じっと見つめたままでした。

カラスは考えました。自分はたしかに全身まっ黒だけど、胸の中に流れているこの血は赤いはず。

でも、さすがに痛い思いをしてまで「さあ、これがわたしの血です。これが赤い色ですよ」などと言いたくありません。

カラスはふたたび考えました。そういえば、自慢のこの舌。この舌だって、昔々のその昔は、ちょっとは赤かったはず。うん、そうだ、これなら痛い思いをしないで、すみそうじゃないですか。

ですが、自分の舌の色がいったい何色だったかをカラスが確かめようと思ってみても、このくすんだ灰色の世界には鏡どころか、キラキラ光る水たまりさえないと男の子は言います。

「むむむむむ。しかたがありませんね」

カラスは途方に暮れてしまいました。小屋の窓からは、雪の降りしきる真冬の夜のような、寒々しい灰色の世界が見えていました。窓といっても、窓枠だけの窓です。ガラスは入っていません。

灰色の虹

ぼんやりと外を見ていたカラスが口を開きました。

「あれれっ？　ぼっちゃん？　なんだか塔の先っぽが折れて、落っこちてきたようでございますよ」

本当でした。どうやら男の子は、さぼり過ぎたようです。塔は男の子がしょっちゅう手をかけて直してやらないと、すぐに崩れてしまうのです。

ズズーン。

これでおそらく、ひと月分くらいの男の子の作業が無駄になってしまったはずです。

その日からでした。

その日から、男の子が塔^{とう}を築^{きず}くかたわらで、カラスは始終^{しじゅう}、おしゃべりをして過^すごすようになったのです。

男の子は以前^{いぜん}と変^かわることなく、かけらを拾^{ひろ}い集^{あつ}めては塔^{とう}を直し、あるいは積^つみあげて、毎日毎日、休むことなく働^{はたら}いていました。

でもカラスは何もしません。ただ男の子のあとをついてまわって、延々^{えんえん}とおしゃべりをするだけでした。

「ぼっちゃん？ 今、お話ししても、よろしゅうございますか？」

カラスは、いつもそう言って、男の子に話しかけてきました。

カラスは自分のいた世界について話しをするのが好きでした。

灰色の虹

「どうぞございましょう。ぼっちゃんには、ご想像^{そうぞう}いただけないことなのかもしれないのでございますが、わたしは、わたしとまったく同じ、たくさんのカラスといっしょに暮^くらしていたのでございます。本当に、おどろくほどたくさんのカラスたちでございました。家は小^こ高^{たか}い山のふもとの雑^{ぞう}木^き林^{ばやし}の中にございまして、夜がもうまもなく明けるという明けがたになりますと、みなで羽^はばたいて、いっせいに、薄^{うす}い紫^{むらさき}色の明^{いろ}けの空に向^むかって飛^とび立つのでございます。それはそれは、にぎやかでございますよ。そして、ぼっちゃんと同じ、人のたくさん住^すむ町までひとつ飛^とびいたしまして、朝一番の橙^{だいだい}色のお日さまの輝^{かがや}きを遠^{とお}目に見なが^めら、お仲間^{なかま}たちといっしょに朝食^{ちょうしょく}をいただくのでございます」

どうやらカラスは、色にまつわる話しがとても好きなようでした。カラスの話しの中には色の名前がたくさん出てきました。

カラスは、天をサッと、はくように、羽^は根^ねを広げました。

「ぼっちゃん？ わたしの世界では、夜になりますと、たくさんの星が、人知れず出てまいりまして、この広い夜空をうめつくすのでございます」

カラスにつられて男の子が空を見あげます。

「ご想像^{そうぞう}いただけますでしょうか？ この空にでございます。そしてときには月が白く黄色く、まあるく輝^{かがや}くのでございます。そうしたときの空の色は、ここのような黒ではございませ^あい^{いろ}ろ。藍色ともうしまして、それはそれは深^{ふか}い青色となつて空が光^{かがや}り輝^きくのでございます」

カラスは男の子といっしょになって空を見あげていました。その口から、ため息^{いき}がもれてしまいます。

「あのう、ぼっちゃん？　ひとつ、うかがってもよろしゅうございますか？　どうでございましょう。わたしの舌^{した}は、何色でございましょうか」

カラスはそう言うと、舌^{した}をエーッと突きだしました。

男の子に色を教えることをカラスは、すでにあきらめていましたが、黒と灰色のちがいや、かけらが光るときに、ほんの一瞬^{いつしゆん}だけあらわれる、白については、男の子に説明^{せつめい}していました。ですから、もし仮^{かり}に、カラスの舌^{した}がそれ以外^{いがい}の見たことのない色だったとしたら、そのときは、見れば、すぐにわかるはずでした。

男の子はジーッとカラスの舌^{した}を見つめたあとで、答えました。

黒。

「やはりそうでございましたか。じつは、さきほど思いだしたのでございます。わたしの舌^{した}が赤かったのは、わたしがまだ、おさない子どもだったころのことです。わたしがひとり立ちをして、お母^{かあ}さまと別^{わか}れ別^{わか}れになってからというもの、わたしの舌^{した}はすっかり黒くなってしまったのでございます」

カラスは、ため息^{いき}をつきました。

「ぼっちゃん？　そういえば、ぼっちゃんには、お母^{かあ}さまは、いらっしやらないのでございしょうか？」

カラスが聞きました。

男の子が、かけらを^{ひろ}拾う手を休めます。ただ首をかしげるばかりでした。

「ああ、はいはい。そうでした。ぼっちゃん？ お母^{かあ}さまともうしますのは、わたしたちを生^うんでくださったおかたのことです。わたしも、わたしのお母^{かあ}さまから生^うまれたのでございます。ただ、ぼっちゃんとちがいで、わたしの^{ばあ}場合は^{たまご}卵でございますが」

カラスは、お母^{かあ}さんのことまで男の子に^{せつめい}説明しなければなりません。男の子は何ひとつ知らなかったのです。でもカラスは、そうした男の子にも、いやな顔ひとつ見せず、やさしく^{ていねい}丁寧に、ひとつひとつ^{せつめい}説明していました。

「ぼっちゃん？ それにしても、このかけらは、いったいどこから^ふ降ってくるのでございましょうね？ 大きいのに、小さいの。もひとつ小さいの。どうやらみな、ふわふわなようでございます」

カラスは、口にくわえたかけらをパクッと^の飲み^こ込みました。

「うん、あまい。これもあまくて、これもあまい？ ペッ！ ペッ、ペッ！ にがいの、ペッ！ ああ、まずい。なんとまあ、^{あじ}味はともかく、中には食べられるものもあるようでございますから、^{ふしぎ}不思議なものでございます。はてさて、これらのかけらとは、いったいなんなのでございましょうね？」

むずかしい^{しつもん}質問です。男の子に答えられるはずありません。

灰色の虹

「ああ、ぼっちゃん、お気になさらないでくださいな。わたしのつまらない、ひとりごとでございます」

空を見あげるカラスの横顔^{よこがお}を、男の子は、じっと見つめていました。時間が静かに流^{なが}れていきます。この灰色の世界には、そんなふたりしかないのです。

「ぼっちゃん？ もしわたしがいなくなったら、ぼっちゃんは悲^{かな}しんでくださいますか？」

舞^まい落^おちる無^む数^{すう}のかけらが、空の上から、やむことなく降り続^{つづ}いていました。

「いいえ、ぼっちゃん。もしもの話しでございます」

そんなある日のことです。

一日分の^{しごと}仕事を^お終えた男の子は、^こ小屋でカラスとふたり、むかいあつて^{しょくじ}食事をとっていました。

^{しょくじ}食事を^{ようい}用意するのも男の子でした。カラスは男の子が^{あつ}集めたかけらをただ^っ突っついて食べるだけです。

「ぼっちゃん？ この灰色のかけら、見た目はまるで^{かみ}紙か何かの^も燃えかすのようでございますから、たとえこの^{てんち}天地がひっくりかえったといたしましても、わたしたちの食べられそうなものに見えるなんてことは、まずないと思うのでございます。もし、ぼっちゃんがいらっしゃらなくて、わたしひとりでございましたら、はたして食べてみようなんて気になれましたかどうか」

カラスは一番大きなかけらをひょいと、つまみあげて、パクッとひと^ののみ^こ飲み込みました。

「ああ、おいしい。ぼっちゃん？ たいへんおいしゅうございます。ぼっちゃんは、おいしくいただけるかけらを見つけてくるのが、本当に、おじょうずでございますね」

そう言うと、カラスはさらにもうひとつつまみ、かけらをつまむと、ゴックンと^の飲み^こ込みました。カラスのおしゃべりは^{つづ}続きます。

「でも、ぼっちゃん？ どうしてこれらのかけらは、どれもこれもみな、ふわふわっとして軽い^{かる}ものばかりなんでございましょう。ぼっちゃんが毎日^{とう}塔^つに積みあげていらっしゃる、あのたくさんのかけらにいたしましても、見た目ほど重^{おも}くはないようでございます。おどろくべきこととでございませぬ。このような軽い^{かる}ものばかりで、あのようになくくて、どっしりとした高い^{とう}塔^{きず}が築^{きず}かれているのでございますから」

カラスは感心^{かんしん}したように何^{なんど}度も何^{なんど}度も、うなずいていました。

「ぼっちゃん？ そういえばこの世界には何かこう、手にしてみますと、ずしりと重^{おも}たいものは、ないのでございましょうか」

カラスが聞きました。

男の子は立ちあがります。

どうやら男の子には、何か思いあたるふしがあるようでした。食事^{しょくじ}の途中^{とちゅう}でしたが男の子は立ちあがると、小屋^{こや}にひとつあるっきりの引き出しの前に向^むかいました。そして、引き出しの中から短^{みじか}い棒^{ぼう}のようなものを取り出したのです。

それが、男の子の大切な大切な宝^{たからもの}物^{もの}でした。

他^{ほか}のどんなものともちがう、かけがえのない宝^{たからもの}物^{もの}でした。

ふわふわっとして軽^{かる}かったりすることはありません。

それだけは、ずしりと重^{おも}たかったのです。

触^ふれると、ひんやりと冷^{つめ}たくて、この世界にある他^{ほか}のものと同じように、ちらちらと光ることもなく、時間がたっても崩^{くず}れていくことのない、ただひとつのもの。

「ぼっちゃん？　どうか、ぼっちゃんのその大切^{たからもの}な宝物^{はいけん}を、拝見^{はいけん}させていただけないでしょうか」

カラスがそう聞くと、男の子は、うなずきました。

カラスは、それを突^つつついてみたり、においをかいでみたり、ペロツとなめてみたりして、いろいろと確^{たし}かめはじめました。

「まちがいありません、ぼっちゃん。これは鉄^{てつ}でございます。鉄^{てつ}でできた、ねじというものでございます。もっとも、ねじにしては、しょうしょう大きいようでございますから、ボルトと呼^よばれるたぐいのものになるのかもしれませんが。さびてはいないようでございますが、すっかりくすんで灰色になってしまっているようでございます」

そう言うと、カラスは自分の爪^{つめ}や羽根^{はね}を使^{つか}って、ほんの少^{すこ}しだけ、ねじの頭^みを磨^{みが}いてみました。

ねじが輝^{かがや}きはじめます。

まわりにある淡^{あわ}い光^{あつ}りを集^{あつ}めて、反^{はん}射^{しゃ}して、キラッ、キラキラッ、キラッと、輝^{かがや}いたのです。

それは、きらめくような、まばゆい輝^{かがや}きでした。

はじめて見る^{かがや}輝きでした。

それまで一度も見たことのない^{かがや}輝きでした。

男の子はその^{かがや}輝きに、すっかり魅^みせられてしまったようでした。

^{いっしゅん}一瞬たりとも目をはなすことができないようでした。

「ぼっちゃん？ わたしもあれこれとこの世界のものを^{ぎんみ}吟味してまいりましたが、このようなものはこの世界では見たことはありません。ずしりと重^{おも}たくて突^つつついても壊^{こわ}れないくらいかたく、そしてなにより、キラッ^{かがや}と輝いています。これは、まちがいなく人の作ったものでございすし、わたしの世界には数^{かず}えきれないくらいたくさんあるものでございす。わたしの考えで、たいへんもうしわけないのでございすますが、わたしは、このねじは、わたしと同じく、わたしの世界からこの世界に^{まよ}迷い込^こんだものだ^{かくしん}と確信しております」

それを聞いた男の子は、サッと、勢^{いきお}いよく、うしろを振^ふりかえりました。そして跳^はねるよう^はにして窓^{まど}辺^べへ駆^かけよると、窓^{まど}から身^みを乗^のりだして塔^{とう}の上^{うへ}の上^{うへ}のさらに上^{うへ}、あらゆるかけらが降^ふってくる、そのみなもと。永^{えい}遠^{えん}に明^あけることのない漆^し黒^{こく}の闇^{やみ}の夜空を見あげました。

灰色の虹

「やはりそうでございましょうね。わたしも、そしてこのねじも、こうして降りしきる、このかけらと同じように、あの空の上から落ちてきたと考えたほうが、自然でございましょうね」

降りやむことのない灰色のかけらが、灰色の世界に降り続いていました。

灰色の虹

^{ねむ}
眠れない夜。

^{つか}疲れはてて^{ねむ}眠ってしまった男の子は、^{ゆめ}夢を見ることになります。

おそらく、それが、男の子の見た^{さいしょ}最初で^{さいご}最後の^{ゆめ}夢です。

^{ゆめ}夢の中で男の子は、たくさんのカラスたちといっしょになって、いっ
せいに、^{むらさきいろ}紫色の明けがたの空へ^む向かって^は羽ばたいていました。

男の子の^{せいかつ}生活が^か変わります。

男の子は^{ねむ}眠らなくなったのです。

男の子が^{ねむ}眠りにつかなければ、この明けない夜の世界に^{あした}明日は来ません。男の子は休むことなく、ただひたすらに、^{とう}塔を作る^{さぎよう}作業に^{ぼつとう}没頭するようになったのです。

^{すこ}少しでも高く。

いっこくでも^{はや}早く。

見ているだけで男の子のそうした思いが^{つた}伝わってくるようでした。

それほどまでに^{いっしょうけんめい}一生懸命、男の子は^{はたら}働くようになったのです。

男の子は^{とう}塔を高くしていけば^{ぜったい}絶対に、カラスのいた世界に行けるものだ^{しん}と信じてうたがいませんでした。その世界からやってきたものは、いまやカラスだけではないのです。あのねじ。そう、男の子が長いあいだ大切に^{たからもの}してきた宝物も、その同じ世界から、ひそかにやってきていたのです。

それだけではありません。

男の子のその世界への思いをさらにかきたてていたのは、それまで、とりとめもなく聞いていた、カラスのなにげない話しの数々でした。^{さいしょ}最初にそれを聞いていたとき、男の子には、それがなんのことだか、さっぱりわからなかったはずです。ですが今、こうして灰色のこの世界とはまったくちがう別^{べつ}の世界があるということを^{かくしん}確信してからというものの、そうしたカラスの話しのすべてが、すうっと水のように男の子の中に広がって行って、そのまま^{えすがた}絵姿となり、頭の中に^{せんめい}鮮明に思い^{えが}描けるようになっていったのです。

男の子をとくにはげしくかきたてていたのは、^{つぎ}次の話しでした。

「ぼっちゃん？ わたしのいた世界には、それはそれはたくさんの^い生きものが暮^くらしているのございます。十や二十じゃございません。百や二百でも、千や万でも、^{おく}億でもございません。それこそ星の数より多くの^い生きものが、みないっしょに暮^くらしているのございます。ぼっちゃんのような人間のお子さんだけでも、きっと^{すうおく}数億はいることをございましょう」

ああ、なんということでしょう。カラスがカラスの仲間たちといっしょにいつせいに雑木林から飛び立っていったように、そこへ行きさえすれば、男の子は自分とまったく同じ、人の子たちといっしょに、町の中、公園の中、さらにはカラスが住んでいたという雑木林の中をだって、自由に駆けまわることができるのです。どこまでも、どこまでも、どこまでも、どこまでも。もう、ひとりぼっちなんかじゃないのです。みんなみんないっしょです。数えきれないくらいたくさんの仲間たちと、いっしょなのです。

男の子は、自分の持てる力のすべてをつぎこんで、働きに働き、さらにもっと働いて、塔を高く高く積みあげていきました。

眠らずに、休まずに、ときには食べることさえ忘れて。

そういった男の子を見ていて、カラスはだんだん心配になってきました。

ですがカラスが男の子の気をそらそうと思って、とっておきの話しの数々をあれこれ、つぎることなくしてみたとしても、結局は無駄に終わってしまったはずです。

男の子の胸の中は、まだ見ぬ世界への思いで、いっぱいだったのです。

灰色の虹

ぼくは、もう、ひとりぼっちじゃ、ないんだ。

あの空の向^むこうには、きっと、たくさんの仲^{なか}間^またちがいるんだ。

会いたいなあ。

会いたい。

会いたいよ。

ま^ま待^まってて、みんな。

ぼくは、今、そっちに行くから。

かならず行くから。

だから、ま^ま待^まってて。

だから、ま^ま待^まってて。

とう塔は今まで見たことがないくらい、高く高く、そびえたちました。

ですがとう塔はまた、今まで見たことがないくらい、細く細くなっていきました。

さいわいなことに、この灰色の世界に風は吹きません。けれども、もし風が吹いたなら、すぐにでもとう塔はポキリと折れてしまったことでしょう。それほどまでに高く、高く、細く、とう塔はの伸びていったのです。

あまりにも細すぎて、今ではもう、男の子はとう塔の上までのぼ登れなくなっていました。ですから細く長くの伸びたとう塔の上にかけらを積みあげるのは、カラスのやくめ役目だったのです。

男の子はとう塔の一番下からておぐるまえんえんお押して、お押して、のぼ登れるぎりぎりのところまでのぼ登って行って、そこに、はこ運んできた中身をあけます。

するとカラスが、そこからとう塔の上までなんどなんどおうふく往復して、男の子がはこ運んできたかけらを、きれいに、ぜんぶなくなるまで、ひとつのこ残らず口にくわえて、上にはこ運んでいくのです。

それは、男の子にとっても、カラスにとっても、たいへんなさぎょう作業でした。

カラスは、なにも男の子にたのまれたから、そうやって手伝いをして
いるわけではありません。カラスはもう、見ていられなくなったのです。

気づくと、カラスは男の子を手伝っていました。

そして気づくと、ふたりは同じ目標^{もくひょう}に向かっていっしょに働^{はたら}いていたのです。

ふたりがともに目ざしていたのは、この空の上にあるかもしれない別^{べつ}の世界。カラスの生まれ^う育^{そだ}ったふるさとにして、男の子がすべてを投げ^なうってでも、どうしても行きたいと願^{ねが}う場所^{ばしょ}。

そう、どんなにつらくても、男の子はあきらめませんでした。そして、そうやって、あきらめずに、ずっと続^{つづ}けてこれたからこそ、ここまで塔^{とう}を高くすることができたのです。そして今もまだ、あきらめていないからこそ、これから先もずっと、続^{つづ}けていけるのです。

でもカラスは、うすうす気づいていました。

この塔^{とう}をいくら高くしてみたところで、別^{べつ}の世界どころか、この世界のどこへだって、たどりつかないかもしれないことに。

塔^{とう}の先を見ているのはカラスだけでした。どれほど塔^{とう}が高くなろうとも、空はまださらに高く、どこまでいっても、はてがないかのようでした。

寝^ねずに働^{はたら}き続^{つづ}けている男の子の顔は、もう目もあてられないありさまでした。

ほおがすっかりこけてしまい、目の下のくまは、どうやったって消^きえそうにないくらい、まっ黒になっていました。

だれ目^{げんかい}から見ても、男の子は限界でした。

何か手をうつべき時がきたようです。

カラスは心を^き決めました。

カラスは、うそをつくことにしたのです。

「ぼっちゃん？　ぼっちゃんは小屋^{こや}に^{もど}戻って、どうか、おやすみくださいませ。いいえ、ご心配^{しんぱい}なさらなくても、だいじょうぶでございます、けっこうでございますよ。あとの作業^{さぎょう}はわたしがぜんぶ、^{のこ}残さずやっておくことにいたしましょう。ですから、どうか、ぼっちゃんは、おやすみくださいませ。なにせ明日^{あした}は、たいへんでございますよ」

カラスは、かまわず^{つづ}続けました。

「わたしたちの^{きず}築きあげたこの^{とう}塔が、もうまもなく、あの天のはてにとどくようでございますから」

カラスがそう言い終わるか、終わらないかのうちです。

バンッと音が^な鳴って、まるで^{でんりゅう}電流が走ったかのようでした。

^{いきお}勢いよく、男の子は、サッと、^{とう}塔を見あげました。

まさに、^{かみなり}雷のごとく、カラスの「天のはてにとどく」という^{ことば}言葉があたり^{ひび}に響きわたり、男の子をはげしく、体のしんからはげしく、ブルルツと、ゆさぶったのです。

目を凝^こらして見あげてみても、^{とう}塔の先はまるで見えません。

男の子の耳にはもう、カラスの声はとどいていませんでした。

今から行くよ。

ぼくは行くよ。

^ま待ってて。

行くまで^ま待ってて。

^ま待っててみんな。

^ま待ってて。

男の子はカラスが止めるのも聞かず、^{いっしんふらん}一心不乱に^{とう}塔を^{のぼ}登りはじめました。

^{とう}塔をぐるっとまわって上にあがっていく長い長い^{さかみち}坂道は、風が^か駆けぬけるような目にも止まらぬ^{はや}速さで一気に走って、あがっていきました。

いったい男の子のどこに、そんな力が^{のこ}残っていたというのでしょうか。

あとを追いかけるカラスは、男の子についていくのがやっとでした。

^{いき}息を^き切らして^{けんめい}懸命に、黒いつばさを^は羽ばたかせていました。

やがて、道は^{とぎ}途切れます。

そこから先は^{とう}塔が細すぎて道を作れなかったのです。

そこにはまだ男の子が^{はこ}運んできたかけらが山のように^つ積まれていました。

ここから先は^{とう}塔をよじ^{のぼ}登っていかなければなりません。

男の子は^{とう}塔をよじ^{のぼ}登りはじめていました。

「ぼっちゃん？ そんなに^{いそ}急がなくてもだいじょうぶでございます。ハア……、ハア……、だいじょうぶでございますよ」

カラスは^{いき}息もたえだえなようでした。

「ぼっちゃん？ ^{とう}塔はまだ天にはとどいておりません。まだできていないのでございますよ。お願いでございますから、ぼっちゃん、また^{あした}明日に……、また^{あした}明日にいたしましょう？」

カラスがもう何を言っても無駄なようでした。

それでもカラスは男の子のまわりを、ぐるぐるとまわりながら、何度も何度も同じことを言って男の子を思いとどませようとしていました。

「ぼっちゃん？ 下におりましょう？ 危険でございますよ。本当に、本当に、危険なのでございますよ」

でも男の子の心の中には、そうしたカラスの言葉は、いっさいとどいていないのです。

ま
待っててみんな。

か
駆けめぐっていたのは、そうした思いだけでした。

それは、なによりもはげしく、また、強い思いでした。

男の子が登るにつれて、塔はますます細くなっていきました。

男の子が手をかけただけで、塔がしなるようになっていました。

カラスが言うまでもなく、だれがどう見ても危険でした。

でも男の子には、そういったことはいっさい関係なかったのです。

男の子は、ただ、ただ、上を見ていました。

その先に行けば、自分と同じ人の子が、たくさんいるのです。

その先に行けば、夜はやがて明けて、空が明かるくなるのです。

その先に行けば、カラスたちがいっせいに、飛び立っていくのです。

灰色の虹

上を上を。

上を目ざして男の子が登^{のぼ}っていきます。

ただただ上を目ざして男の子は、塔^{とう}を登^{のぼ}っていったのです。

危険^{きけん}をかえりみずに。

ぼくはね、カラスさんに、聞いたんだよ。

人の子には、男の子と、女の子が、いるんだって。

たくさん、たくさん、いるんだって。

会いたいなあ。

会いたいなあ、ぼくと同じ、子どもたち。

それからね、こんなことも、聞いたんだよ。

ぼくより、もっと、ずっと、ちっちゃい子は、あかちゃんて、言うんだって。

それでね、あかちゃんは、みんな、お母^{かあ}さんから、生^うまれてくるんだって。

ああ、お母^{かあ}さん。

お母^{かあ}さん、お母^{かあ}さん、お母^{かあ}さんだって。

ぼくにも、お母^{かあ}さん、いるのかな。

上に行けば、ぼくにもお母^{かあ}さんが、待^まっているのかな。

待^まってて、今、行くから。

待^まってて。

待^まってて、みんな。

待^まってて、ぼくの、お母^{かあ}さん。

待^まってて……

灰色の虹

カラスはまだ男の子を助けられるものと信じていたようです。

でもそれは、かなわぬ望み。

崩れはじめた世界の崩壊を止めることは、だれにもできないのです。

塔は崩れ、男の子は地に吸い込まれるようにして落ちていきました。

それは一瞬の出来事でした。

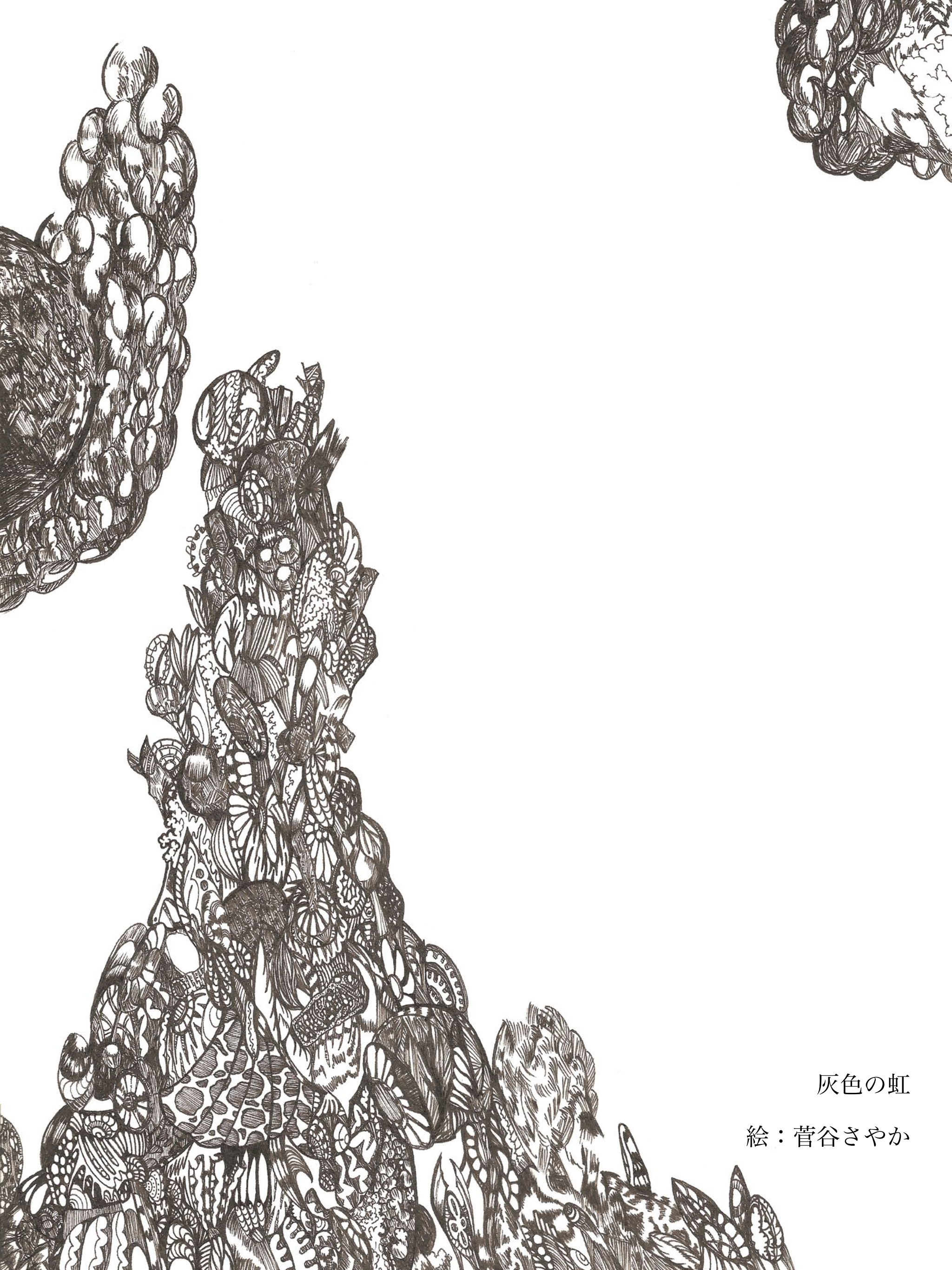
そしてカラスの見まちがいであれば、

このときカラスは虹を見ているはずです。

男の子は虹になったのかもしれません。

でもその虹も、すぐに消えてしまいました。

降りしきる世界のかけら以外には何もない、灰色の世界です。



灰色の虹

絵：菅谷さやか



なかのたいとう

ねん ほっかいどう う 1970年 北海道生まれ。 どうわきつか 童話作家。

ねん ご せかい い こ 100年後の世界に生きる子どもたちにむけて、 いまつた 今伝

えなければならぬことをテーマに、 どうわ じどうしょうせつ か 童話、児童小説を書いています。

しゅみ しさく 趣味は思索。 ロマンチスト。 くうそうしょうねん げんざい かつどう ちゅうしん 空想少年。現在の活動の中心はブログと
とうぎよう あきはばら 東京の秋葉原になります。

2012年 9月 THE TOKYO ART BOOK FAIR 2012 出展

ブログ <http://ameblo.jp/nakanotaito/>

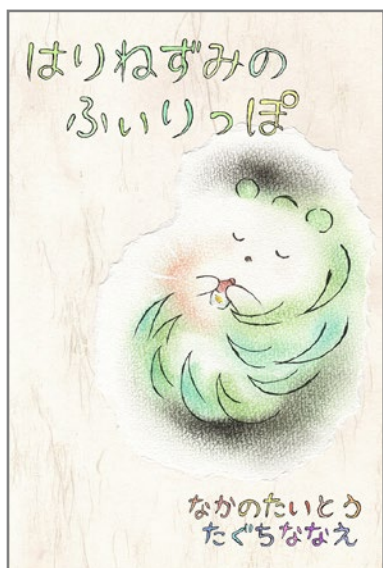
メール nakanotaito@me.com



『雪だるまのアルフレッド』

なかのたいとう さく わ か え 作 和華 絵

ゆき じょうおう ちゅうじつ 雪の女王の忠実なしもべとして ごくあくひどう かぎ 極悪非道の限りをつくしてい
たゆき 雪だるまのアルフレッドは寝ている子どもたちをおそ 襲い、そ
のしあわ ゆめ うば 幸せな夢を奪っていた。ところがある日、夢を奪おうとし
たアルフレッドは、その女の子に恋をしてしまう。運命の
はぐるま いま おお か 歯車が今、大きく変わり始める...



『はりねずみのふいりっぽ』

なかのたいとう さく たぐちななえ え 作 たぐちななえ 絵

「あのう、ぼくのこころをしりませんか？」
「ほほほ、おかしなことをきくものです。こころなら、ほら、
そこにあるじゃないですか」
よる もり なか 夜の森の中をふいりっぽは心を探してまわります。あ 明かりは
て 手にしたランプの中で光る蛍のじじだけ。よる 夜はしだいに更け
ています。ふいりっぽのこころは見つかるのでしょうか...



すがや
菅谷さやか

1986^{ねん}年 ^{いばらぎけん}茨城県生まれ。 ^{もよう が か}模様画家。

2009年 7月 茨城県鉾田市市長に絵『ひまわり』を寄贈

2010年 4月 オーストラリア Melbourne 展覧会 出展

2012年 5月 新宿 apARTment 出展

^{もよう}模様や^{せん}線を手^て描きで^が描いています。^{しゅみ}趣味は^{おんがく}音楽&^え絵の^{さが}ネタ探し。ロマンチスト。今は^{いま}寂しがりやで^{さみ}ネガティブな^{せいかく}性格を^{なお}治してポジティブになれるよう^{がんば}頑張っています。

ブログ <http://ameblo.jp/tomatogallery/>

Gallery <http://www.artspace-keika.com/>

メール sugaya-s@yellow.plala.or.jp

はいいろ にじ
灰色の虹

さく
作
え
絵
でんししよせきばんさくせい
電子書籍版作成

なかのたいとう
すがや
菅谷さやか
なかのたいとう

はっこうび
発行日
はっこうしゃ
発行者

ねん がつ にち でんししよせきばんだい はん
2013 年 3 月 15 日 電子書籍版第 1 版
イーパブスドットジェーピー パブ リ ッ シ ン グ
ePubs.jp Publishing
とうきょうとたいとうくたいとう
〒110-0016 東京都台東区台東 1-19-11-101B
<http://publishing.epubs.jp/>

"Gray Rainbow"

Text by copyright © 2010, 2012 NAKANO TAITO
Illustrations by copyright © 2012 Sayaka Sugaya

All rights reserved. No part of this publication may reproduced, distributed, or transmitted in any form or by any means, or stored in database or retrieval system, without the prior written of the publisher.

Published by ePubs.jp Publishing
1-19-11-101B, Taito, Taito-ku, Tokyo, Japan
<http://publishing.epubs.jp/>